

---

# とある白井黒子に憑依 挿話

真戸あかり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある白井黒子に憑依 挿話

### 【Nコード】

N7568T

### 【作者名】

真戸あかり

### 【あらすじ】

『とある白井黒子に憑依』本編の追加エピソード。

本編中の時期は、とある〴〵の話数にあたります。

挿話 上条当麻 (とある28・5) (前書き)

残酷描写があります、ご注意ください

挿話 上条当麻 (とある28・5)

廃ビルの中は壁の一画が壊され、銃痕がいくつも空いており戦闘の跡を匂わせる。

その中を通過していくと、戦闘音が聞こえた。その部屋に躊躇なく飛び込む。

「おい！やめろっ」

部屋に入ったつんつん頭の黒髪の青年は、テレポートした女を捜していたホスト姿の男の目の前に立ち、そう言った。

「誰だテメエ、見て分かんねえのか？いま取り込んでんだ。邪魔すんな」

「分かってるから邪魔してんだよ」

「んだとテメエ、俺によくそんな口聞けるな」

「お前なんて誰だか知らねえよっ」

「ムカついたぜ。その女どもと同じように、これで消えな！」

瞬間、未元物質ダイククマターがつんつん頭の青年に飛んでくる。それをサイドステップで避ける。

その女、と言われた所には、黒ずんだ2つの塊があるだけだった。

「！！！」

再度飛来する不可思議な光に、つんつん頭の青年が右手を差し出すと物が壊れるような音が鳴り、かき消えた。

「…なんだと！？なに、しやがった」

「さあな」

部屋の中央にいる男から、勢いよく未元物質が竜巻のように飛び出してくる。

「変な能力もってやがるようだが、これならどうだ？」

「ちっ」

それを避け、右手で消し、ダッシュで近づく。

「うおおおおー！」

頬に消しきれなかった物質がさわり、そこが裂ける。

髪の毛も、いくつか溶けた。

それでも右手を盾に、まっすぐ、ただひたすらに男の方に向かう。

未元物質と、右の拳の殴り合い。

「てめええええ！」

出す度に消えていく自らの能力。プライド、アイデンティティといつてもいい己の全て。それをどんな物質に変質させようとかき消し、近寄ってくる。

「どうなってやがるんだ、こいつはよっ！？怖くないのかっ！！俺はレベル5、学園都市第2位の超能力者なんだぞっ！！」

「だから、どうしたってんだ」

「くっ、何でくらわねえ！」

すぐさま手の届く距離まで青年は来ていた。

「お前は、こんな力を持っていて何やってんだ！これが女を殺すために振るう力なのかよ！」

「テメエに何が分かる。邪魔なんだよ、何もかもが！その女も！お前も！第一位も！！」

「そうやって消していけば済むのかよ、お前の世界はそんなちっぽけなのか」

未元物質を纏ったパンチに右手を掠らせ、無力化したまま殴る。回避は間に合わない。

拳がお互いの顔にヒットし、仰け反る。

「俺の前にいる奴はみんな邪魔だ！消えろ！」

「目の前にいる俺一人、消せねえじゃねえか」

「うっせえ！」

「わがままも大概にしろよ。何のためにその力を使うんだ。誰かより強くなるためか？なら一番強くなってどうする。わがままを通すだけなら赤ん坊と変わんねえよ。お前の求める力ってそんなものか！そんなちっぽけな安っぽいものにするための力なのかよ！邪魔だからって力づくで排除するってのなら、いつでも俺がお前の目の前の邪魔になってやる。誰もが簡単に倒せるなんて思うなよ。いいか、歯あくいしばれ」

口から出た血を左の拳で拭き、右手に渾身の力を込める。

「そのふざけた幻想をぶち殺す！！」

何度も避けられ吹っ飛ばされても、何度でも近付き、殴りかかる。

左腕は避け損ね吹っ飛ばされたとき右手を庇い、折れた。激痛が走るが、肘から先は動きはしない。

「くそつたれ、まだだっ！」

「ム力つくんだよおおお！！早くくたばりやがれええ！！！」

未元物質の放出の勢いに負けないよう全体重を乗せて右手を前に出

す。

能力は消していても、離れたらこちらは近づくことしかできない。ジリ貧だ。左手が使えない以上、走るのにも支障が出た。次に一度でも離れたら、後は一方的に蹂躪されるだろう。放出量がさらに増えた！

殴る勢いは未元物質の勢いに消された。奴はそれに気付いてニヤツと厭らしい笑みをそのホスト顔に浮かべる。

「まだだっ！」

ただ勢いの無くなって突きだした手で、奴の胸ぐらを掴んだ。離れては駄目だ！

「離れるよゴミがっ！汚ねえ手で掴んでんじゃねえぞ！」

奴の胸ぐらを右手で掴み能力を消し続けた。

「まだだっつて、言ってるだろ……」

動かない左手を放棄し相手の顔面に全力で自らの頭を叩きつけた。

グシャ

鈍い、嫌な音がする。

「ぐあっ」

グシャ　グシャ

「ひっ」

鼻骨を折り顔が鼻血で血まみれになっても、額を目一杯の力を込めてぶち当てる。奴は血を飲み込んで、咳き込んだ。

歯が額にあたり、額が裂ける。頭が勢いよく当たる度に瞬間意識が飛ぶ。

右手を離せばあの分からない能力でこっちがやられる。だから、右手は奴を掴んだままだ。

何度も、何度でも頭を叩きつける。

どれだけの間、繰り返しただろう。

ホストの様な端正な顔は赤黒く血まみれで、鼻は変な方向を向いている。相手の両手は力なくぶら下がり、下半身から失禁していた。もう、意識はないと判断して、頭突きをやめる。

額は相手の血と自分の血で真っ赤だ。

離すものかと力と意志を込め握った右手は、拳の形に凝固しているかのように動かなかつたが、ゆっくり筋肉を解し、手放す。

奴はそのまま地面に倒れた。

それでも気付かない相手を見ながら、よろよると額に刺さった奴の歯を、ひっこ抜く。

はあ はあっ

荒い息を深呼吸で整える。

「っ、そんなことより、白井のやつはいったいどこに……」

額の血をハンカチで拭き、布が真っ赤になり拭ききれなくなった。使えなくなった血まみれの布はそこで捨て、それでも流れてくる血は、放置することにした。

動かない左手が揺れる度に痛みが走るが、それを無視し、部屋という部屋を捜す。

黒服たちは撤退したようで、耳をこらしても機械音以外の物音が聞こえない。

どこだ……

いくつもの部屋を急いで捜しているうちに、背後から声がかかる。いつの間にそこに居たのだろう、金髪サングラスにアロハシャツという派手な男が立っていた。

「上やん、ずいぶん色男になったにゃー。捜してる相手はこっちぜよ」

血まみれの顔を見ても動じず、普段どうりに話しかけてきた。

「土御門か、助かる」

案内されて、部屋へと行く。

中には、横たわった少女1人を中心として、床に大きな亀裂が入っていた。

少女はツインテールが乱れ、昏睡している。血まみれではあったが、傷の程度からして自身のものではなさそうだ。所々焦げ、すり切れた所もあるが、手足体、大きな外傷はみあたらない。

少女の名は白井黒子。助けに来た目当ての少女だ。

「生存者はこの娘だけぜよ。診たところ、外傷は少々。臓器もまーダメージは負っているが問題なしだにゃー。ただ脳の気の流れが乱れている、というところかにゃ。もう病院へは連絡しといたぜよ。退散するなら今だぜー」

「救急車が来るまで、ここで待つてる。ありがとうな、土御門」

「よせよ、俺も頼まれてこいつの監視に来ただけだにゃー」

「それでもいい。白井は死んで欲しくないんだ、知り合いだしな。

…ビリビリも悲しむ」

さっきの場所で、黒ずんだ2つの塊だと思っていたものをじっくり見る。白い、布の切れ端…ナース帽、か。

看護師姿と思われる少女の死体が2つ…

2人とも容姿は似ていた、と思う。

ほとんど残ってなかったが、溶けきった金のウィッグから見える茶

髪で…よく知った顔立ちの知人に。

2人は助けられなかった。間に合わなかった。せめて、こいつだけでも…

「じゃーな、上やん。俺は先に行くぜい」

「ああ、じゃあな」

こうして裏で会い、学園という表の世界でも会う不可思議な関係。

「白井、お前はここにいちやいけない。おまえも、ビリビリも、闇に落ちたら何度でもこの右手で捕まえて引き上げてやる。そう…何度でも、だ。未来が暗闇ばかりだなんて、そんな幻想、いつだってぶち殺す。だから、いつでも光の当たる世界で笑ってる」

そう言って青年は手に付着した血をズボンの端で拭い、気を失っている少女の額を右手でなでた。

挿話 シスターズ (とある16〜22の間)

「今日は病院にて定期検診の日です、とミサカは一人つぶやきます」  
この病院には体調管理と改善にとてもお世話になっております。

「おや、最近新人の看護師が2人増えましたね。双子でしょうか。2人ともよく似てる外観で、金髪片言のキャラの立った人物だと判断します。」

「まあ、姉妹の数では負けておりませんがね、とミサカは優越感にひたります。」

マスクを付けているので金髪の看護師の顔はあまり分かりませんが、表情の少ない目元でこちらを見えていますね。」

「おや、そっくりさん、ですね。ミ、カ、ウィッグ外しては、いけませんよ、とミサカは隣の人物に、言います」

「あのこも、ミ、カたち、のご同類、で、しょうか。そんなことよ、り、ミサカは横にいるって、わかって、言ってますね、と、つつこみ、ます」

「おや、話している声はお姉様によく似ていますね。」

「もう来ていたのかね。早速検査室にいきたまえ。ああ、君たちはナースセンターで待機しているんだよ」

2人と入れ替わりに部屋に来たカエル顔の医師が、珍しく少々早口でしゃべってきました。

「…なにかミサカに悪いところでもあったのでしょうか。これからあなたの方のお買い物につき合う約束をしていましたのに。思えば短い命

でした。

「勘違いをしているようだが、君に悪いところはもうないよ。まあ、寿命はもう少し経過を見てみないと何とも言えないがね。確実に前よりは長いし、近日中にどうなるものでもないよ」

「安心しました。これであの方との約束が守れます、とミサカはほつと一息いれます」

「いい人でもできたのかな、喜ばしいことだね」

定期検査なので、カエル顔の医師は腕を止めずにお話します。これが、ミサカとのいつもの検査風景です。

いまはカプセルの中で、何も着ておりません。これもいつもの検査風景です。

「じゃあ結果が出るまで、1時間ほどそこで待っていたまえ。そのときにまた来るよ」

カエル顔の医師は検査室から出て行った。

そして、これから診断の結果がでるまでは、ひとりぼっち。これも、いつものこと。

でも、今日は違った。

「こんにちは、ここにいましたか、と、病院内探検中の、ミ、カはフレンドリーに、挨拶をしつつ、発見報告、します」

「くる姉に、この発見を祝い、写真を送らねば、いけませんね、とすでに、取り終え、送ってから、ミサ、は、言います」  
さきほどの金髪マスクの看護師2人が入ってきた。

「どなたですか、とミサカはその看護師2人に話します」

「わたしは、ミ、カです。あなた、は？」

「わたし、は、ミサ、です。あなたは？」

「わたしは、ミ、カです。と、ぼけて、みます」

「それは、しっています、とミサ、はつつこみ、ます」

「…ミサカの名前はミサカですが、と、ミサカは答えます」

「おや、ミ、カさんですね」

「いえ、ミサ、さんですね」

「言えてませんよ。ミサカです、とミサカは冷静にツツコミの見本をお見せします」

「ええ、ミ、カさんですよ」

「いえ、いえ、ミサ、さんですよ」

「言えてませんよ、再度申します。ミサカです、とミサカは勉強の時間のように発音をお見せします」

「はい、ミ、カさんですね」

「いえ、いえ、いえ、ミサ、さんですね」

「まだ言えてません、再々度申します。ミサカです、とミサカは発音をじっくりとお見せします。というか、そろそろこの会話止めませんか？とミサカは建設的な提案をします」

「なるほど、でも少々、おまちください、と、ミ、カはミサ、とこつそり、話し合います」

「」

「」

「了解、です」

「では、いきます」

「「ミ、サ、カさん、ですね」」

「なるほど、2人で足りない単語を補いましたか。やりますね、とミサカは惜しめない賞賛をします」

「さあ、そろそろ結果がたか、ね……」  
入ってきて呆然としたカエル医師が、3人を見てそう言いかけ、止まった。

「き、君たちここはナースセンターではないよ」  
「ざんねん、ミ、カ、妹よ、ミ、カたちの冒険は、ここまでです」  
「それでは、ミサ、妹、さらばです、にげるびゅーと、ミサ、たちは、戻ります」

金髪の看護師2人は部屋から出て行ってしまった。

また会えますでしょうか。面白い人たちだったのに残念だとミサカは思いました。

今日はこれからあの方とお買い物。いい一日になりそうです。

挿話 最終話 真夜中の公園 (とある final 後)

常盤台中学の学生寮。私と黒子は、ここに入寮している。

真夜中、ふと眠りから覚め、横のベッドを見る。

黒子はベッドにいなかった。

ここ数日、夜は大人しく眠っていたのに、やはり、無理をしていたのだろうか…

よく、携帯を見てはため息をついていた。あれは、大事なメールがあつたからなのだろう。

まだ、立ち直れないか… そうだよね。そんなに簡単にいくわけない。よし！と、気合いを入れて跳ね起きる。パジャマから着替えて、顔を洗い目を覚まし、夜に寮から抜け出した不良の後輩を、迎えに行くことにした。

寮からこっそりと離れて、例の公園に行った。

アイツから聞いた場所、公園の奥のさびれた自販機の近く。そこに黒子はいた。

黒子はずっと携帯を両手で握りしめ、微動だにしない。

真剣な表情で、画面を見つめている。

どれくらいの時間が経ったのだろう。

携帯を触り、操作しはじめた。

そのメールを保護しているのか、消しているのか…  
それとも、もう届かない相手に、送ったのか…

クシュン

ずっと見ていた私は、ついくしゃみしてしまった。

「！…どなたですの！？」

「私よ、黒子」

「お姉様でしたの…」

黒子の顔に一瞬、目当ての人が来たのかと希望がよぎるが、すぐ普段の表情に戻った。

「悪かったわね、私で」

「そんなことは申しませんわ。ただ、校則違反でしてよ、お姉様」  
「黒子もでしょ？」

「そう、ですわ。でも私のは」

「超早朝！のトレーニングだったっけ？」

「ええ」

2人してお互いを見て、苦笑した。

「まだ、踏ん切りがつかない？」

「…」

「もう、隠さなくてもいいのよ。私の腕の中でわんわん大泣きしたじゃない。あれ以上恥ずかしいこと、そうないわよ」

黒子の負担にならないよう、つとめて普段どうりに軽く話す。

「そ、それは…一時のあやまちですわ」

「それでいいのよ」

「え？」

「いっぱい泣いて、すっきりすれば、悩み事もなくなるものよ」

「そう、ですわね」

「この際だから、お節介がてら聞いちゃっけど、黒子はどつするのかなあって思ってたさ」

「ほんと、お姉様はお節介焼きですわ」

「それは分かってるって言ったでしょ。ついでにいうと、いっぱい話しても、すっきりするわよ」

「お姉様ったら…」

「重荷はね、一人で持って耐えられないときは、2人で持てばいい

って」

「それは、あの方からの受け売りですか？」

「え、まあ、それはどうでもいいじゃない」

「お姉様は分かりやすいですわね」

黒子が笑った。よし！

「じゃあ、私の秘密の話はあとでしたげるから、あんたの秘密の話  
きかせなさいよ」

「約束ですわよ」

「ええ、いいわよ、受けて立つわ」

そして、いっぱい話した。

いっぱい笑って、いっぱい、泣いた。

夜も明けはじめ、暗かった空が澄み白んでくる。  
私たちの、心のようにな…

「黒子、悪いけど一緒に寮まで送ってよ」

「わかりましたわ、お姉様」

そうして、2人はぎゅっと手を繋いだ。

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7568t/>

---

とある白井黒子に憑依 挿話

2011年6月19日10時48分発行